

中
勘
助

妹
の
死



妹
の
死

今から十八年前の秋、ひとりであの島ごもりをしていたときに、私は九州へかたづいている妹が重体だという思いがけない知らせをうけとった。私は涙をうかめたけれども島を出ようとはしなかった。そのときそんな気もちでいたのである。ところが妹の容態はその後いくらか見なおして、床についたままではあったがつぎの年の夏までもちこたえた。左にかかげる小品は、その夏妹が私にあいたがっているということを引きいていよいよ望みがなくなつた彼女を嫁いり先へ見舞つたとき、たぶんその死

後間もなく、なおまざまざしい記憶と生前枕べでの手控えをたよりに思い出ぐさにもとおもって書いておいたものである。

来てみたら妹は見るかげもなく痩せていた。前ぶれをしなかったののでどんなに驚くだろうと思ったが、驚きもし喜びもするはずのところを極度の衰弱のために目にみえるほどの興奮も示し得ずに——かような不随意的な無表情はそののち私も病気で衰弱したおりに親しく経験し

たことである。——ただひと晩じゆうほとんど眠らなかつた。妹は痩せたために顔がわりがしていた。どちらかといえは細かった目がぱっちりとして切れがながくなり、おとなしく小さかった口が一の字にしっかりと結ばれて、笑うと口もとに縦の深い窪みができる。蒼白く弱々しい皮膚のうえに、それはかつて妹の容貌のうちでいちばん美しいものであったところの柔くひいた眉が、まえよりも濃くのびらかになつたようにみえる。どこといつてとりたてて目にたつのではないがすべてが尋常に人好きのするほうであつた顔に、なにかいい意味で技巧のか

おりのする彫刻的な美しさがそわっている。——私は後にはからずその似顔を能面の孫次郎に見出した。妹も能が好きだった。それゆえ彼女が私のためになんぞ骨の折れることや気のすすまぬことをしてくれたときには、御褒美だといってよく能につれていった。そんなことのために私はこの小品に 孫次郎 という表題をつけようかと思つたこともあつた。——私と不意の久しぶりの顔を見あわせてから暫くして妹は

「□□さんたいへんふとつたわね」
といった。これが最初の言葉だったかもしれない。——

挨拶などはしていられないほど衰えていたのである。

——
どんなところかと思つてきたら妹はぼつとりと土塀にかこまれた陰気な家に住んでいた。病室のまえの二坪か三坪の地面にひばが四五本ならんで、土塀のうえの瓦のすきまにつんぼ草がからからはえている。ときどき色のうすい**弁慶蟹**べんけいがにが目をうごかしながらじわじわとはいあるく。夕がたになると無数の蜘蛛がひばの枝から枝へ、また軒から瓦へといそがしく巣をかける。守宮やもりがでる。そんなものが大嫌いであつた妹は枕にひつたりと頭をつ

けたなりまるで見えないもののように平気でそれをみている。反対の側のやや広い地面には姿もない木がばらばらと立って、そのなかに赤い実のなる小さな木がまじっている。やっぱり無数の蜘蛛が巣をかける。精靈しようれいようとんぼの翅はねが軒端をつたってひかひかと光る。妹は

「私そんな島のこときいて泣いたわ」

といった。——私が島にこもっていたことを、彼女は最初の重体ののち、一時よほど容態がよくなつたときにはじめてきかされたのである。こういう短いひと言にさえわずかに残った気力を一生懸命あつめなければならぬ

ように、ながい間をおいてはぼつりぼつりと蚊の鳴くよ
うな声でいいだすのであった。――

妹には女の子があった。まだ一つで、這ってあるく。
その産のすこしまえから床につきどおしなので一度も抱
いたことがない。ただ這ってあるくのを頭の位置はその
ままに眼を動かせる範囲内だけ眺めていることが有る。
子供はむかひの釜屋の夫婦が無性にかわいがって、たい
がい朝から借りてって一日じゅう遊ばせている。狭い人
通りのない路ゆえ子供のはしやぐ声がよくきこえる。善
い人たちらしい。

黒い蜂が蜘蛛をとりよきて巧に巢からとつてゆく日があつた。また蝙蝠こうもりの飛ぶ夕べがあつた。雨の日も、雷の日も。

井戸ばたへ顔を洗いにゆくと大きなざぼんの木があつて青いのがたくさんなつている。その涼しい木蔭には金色をしたつがいの逞しい鶏が自分たちの領分みたいにいづもならんでいるが、人がゆくと雄のほうが喉をならして羽根のはえた足をのさのさと大股にはこぶ。妹がかたづいてからはじめて上京したときに、ところの風ふうのかわつていていることなど話して笑いながら、盆暮れには家にな

るざぼんをひとつずつ知るべへくばるのだといったが、それがこのことだったのである。

ある日妹は

「□□さんきつとああいうところが好きだからいってごらんなさい。裏のお濠ほりのふちにたったひとつ狭い部屋があるから」

といった。それはもと物置だったところへ畳をいれたので、今でも物置なのだが、いろんなものをつめたあいだに人ならばやつと二人横になれるほどの余地がある。母おも屋やからはずつとはなれて昔のお城の濠にじかづけになつ

ているので、静でもあれば、珍しいも珍しい。水の幅は
 一町ばかり、いちめんの蓮のほかみずあおいに水葵と蒲がまかなにか
 ごちやごちやに茂って、浮き草が敷きつめたようになって
 ている。風の日には吹きよせられたあとに水があらわれ
 て、ふな鮒が鼻をならべているのがみえる。白い蓮の花の咲
 きみちているのはこうごうしいものである。つぼみ蕾はさき
 のほうだけほんのりとあかい。陣笠をあおむけたような
 葉がま夏の日光を湛えかねてゆらゆらとゆれている。巻
 葉も美しい。雨の日はもつともよい。雨あしのすきまな
 くみえるのも、蓑笠の人などゆくのも。鯉、すつぽん、うなぎ鰻

もたくさんいる。もとは菱ひしくいや鶴など人をもおそれず群れていたという。私はこの面白い離れが気にいって、たびたびいってはいつまでもはいっているようになった。

妹は昼のうちはどうととしているが夜になると頭が冴えて眠られない。そしてみんながよく寝ているのに自分ばかりひとり目をさましているのが寂しく、また体も苦しいのでひとをおこしてはむずかる。私もそばに寝ているのだが私だけはおこそうとしない。それは私がたえ心ではどう思おうとも手を出してまではなにひとつし

てやったためしもなく、する気づかいもないからで、
——この傾向はいろいろな理由からその後非常にかわつた。——私もそれで平気だし、妹のほうでも別段ものたりなく思うでもない。——彼女が私に求めて、そして得たのはこの胸であつた。手ではなかつた。——夜なかに妹があんまりじれたり悶えたりすると私は目をさましてひとりで笑う。妹は苦しいときにはこのへんの言葉できつい、きついといつて訴える。自分の苦痛をわかつてほしいばかりに永い間に使いなれたのであろう。妹は大儀だもので用事のほかにはよつぽど気分のいい

ときででもなければそばにいる私にも話しかけない。彼女はあるとき

「吐はきがくるとすぐ□□さんが見にきてくれるから嬉しくて……」

とそれをなかば私に感謝するように、なかば××さん——つれあい——に告げるようにいった。妹がなんにもたべられず、強いてたべる一杯の食事をさえもどしてしまうので、私が吐がくるとは食べたものが出てしまったか、おりあっているかと気にかけてのぞいてみるからである。また××さんの留守に私がほかの部屋で仕事をし

ていると

「すまないけれど寂しいからここへきてちようだいな」という。私は 銀の匙 の原稿をもつてそばへ行って机にむかう。妹はまじまじと私の顔をみたり、うとうととらしくそうに眠ったりする。彼女がながいわずらいのあいだにあいたいといったのは母と私だけだそうだ。そうして……

「私こんなにして二三日うちに死ぬんじゃないかしらん。でももうみんなあいたい人にあつたからいい」
そんなこともいった。そうかとおもえば はやく丈夫

になりたいたいといったり、あんまり苦しくなれば死んだほうがましだ　ともいう。

「家がまわる。ふわふわして体があるかないかわからない」

そんなときに妹はいちばんいやがる。頭がぼうつとしてしまつて、過去も、現在も、未来も、自分も、自分のねている位置も、ねている理由も、なにもかもわからず、一瞬間まえのことも夢のように遠くなつて、ただそのようにわからなくなつたということだけがわかるのである。彼女ははやくわかりたい、その半死半生の状態から

のがれたいとあせって悶えたり泣いたりする。とはいえまったく経験のない私には、その肉体的であるよりはむしろ精神的なものらしい悩みが充分にわからない。

わりあい気分のいい日、私と二人きりのときに妹はこんな話をした。それは去年のことであった。こちらへきてからはじめて雪がふった。ひさしく雪をみなかったもので床についていながら嬉しくて嬉しくて、たべたくてたべたくてしかたがなかったの、叱られるのをやっとな頼んで松の葉につもったのをとってもらってたべた。妹はそれを話すときに、思いだしても嬉しいらしく、子供

みたいにいそいそとした顔をした。彼女は　でもすぐとけてしまった　といった。

病気があまりながびくので妹は自分でも入院してみようかという気になり、皆もすすめていよいよそうときまいった。家を出るときに

「こんだ退院するときは玄関まで歩いてこられるかしらん」
なぞといった。もうじき死ぬのだということをや××さんからきいて自分一人だけ知っていた私はそんなことをいわれるのがつらかった。私は病室までつきそっていった。

帰るとき妹は

「毎日きてちようだいよ」
と行った。

私は毎日病院へ行ってなにをするでもなく寝台のそばに腰をかけている。そのあいだにさきで気がむいたときひと言かふた言話をする。入院のときの運動がさわつたとみえて容態がいつそう悪くなり、頭が毎日のようにぼんやりして心細がる。妹は自分がどうい位置におかれていますのかも、蒲団や寝台のあるなしさえもわからない。そうして食事のときにもいつもものとおりの体の位置でい

つものとおりに食器を出されないと箸のとりかたもわからずに食器を見つめて考えている。そんな風なのでひとしお寂しがって私がゆくと

「寂しいからそばへよって手をもってちようだい」

ということがよくある。そんなとき私は一日手をとって顔をながめている。……妹は

「よっほど胃が悪いのね」

といった。もうじき死ぬというほど衰弱しているのだとも知らないで、彼女は胸のへんにひどい衰弱や、血液の不純になった場合の面白くない徴候とされる無数の皮下

出血をおこしている。

死ぬ二日ばかりまえのことであつた。……私にすぐき
てほしいというのでいってみたら、誰もいないでひとり
つきりぽつねんとねていた。

「どうした」

といてそばへよつたら

「寂しいから手を握って」

といて手をだした。その前日であつたか、入院してか
らはじめて頭がはつきりしてなんでもよくわかるといっ
て非常に喜んでいたが、この日も気分がいいといつてい

つになく話などした。ぼんやりすると死にたがるのがはつきりすればやっぱりよくなりたがるのを自分でもおかししいといつて笑った。妹は……ぐちをこぼした。それからもうすこしうえへ体をあげて　　というのでそうつと抱えてずれた枕のほうへ押しあげようとしたら、すこし強くゆれたためにせつかく冴えていた頭がまた朦朧もうろうとしてしまった。けれども彼女はちよつと笑顔をみせて、はじめに私にそんな世話をしてもらうのが嬉しいようなきまりが悪いような様子をした。それがあとにも先にも私が手をくだして世話をしてやったたたった一度である。枕

もとはには見舞いにもらった西洋水仙の鉢植えがおいてあったが、あれほど花が好きだった妹ももうそれをみようともしなかった。私を買ってきて壁にとめた版面にもただきれいだことと気のないひと言をくわえたただけであつた。窓のまえにはポプラきようちくとうと夾竹桃の若木があつて幾羽の鳩がよく餌をひろつていた。天神様からきたのである。

たしかこのことであつた翌々日の朝であつた。病院から急の迎いがきたのでとりあえずいった。××さんは海峡をこえて往診に出た留守であつた。いつもおいてゆか

れるのをいやがってひきとめるのが、その日は気分がい
いからといって承知したのだそうだ。で、つきそいの者
だけしかいなかった。妹は唇の色もなくなっていた。私
と母の顔をみて

「苦しい。唇をしめして」

と虫のようにいった。起きあがって坐っているうちにう
つぶせに倒れて脈が非常に悪くなっていたのをようやく
注射でとりとめたのだという。私は 予期した時がきた
な と思った。注射のためにちよつと気力をとりかえし
たときに妹は

「私はもう今日はごはんたべない」

といった。いつも叱られて強いて食事をさせられるのである。義理の父母も釜屋のかみさんもきた。乳母は子供を抱いてきた。妹は涙ぐんであわてている人たちを平気に見まわしていた。そして自分の背中のほうに子供を抱いて立っている乳母に

「こつちへこなければ見えやしない」

といった。釜屋のかみさんが乳母の手から子供をうけとってみせた。妹はただひと目みただばかりで平気な顔をしていた。彼女は苦しきうなるとうわことみたいにいるんな

ことをいっただが、それは決してうわことではなかった。いつのまにか目をとじてしまっただけでいながら先生のいないをよききわけて

「頭ばかりはつきりしてなんにもわかりませんからもう……」

といった。また訴えるように義理の母を呼んで

「お母様苦しい」

といった。妹はしんからその母に頼っていた。お母様は涙をこぼして

「ああ　ああ　もうじきらくになるけんの」

と行って背中をさすった。妹は目をとじたままそのせつない、頼りない、奇怪な悩みをどうぞして皆にわからせてはやくどうにかしてもらいたいというように、苦しいなかに言葉に力をいれてくりかえしくりかえしこんなことをいった。

「いくら息をしようと思ってもできなくなってしまう。どうしたらいいんでしょう。ほら、いくらしようと思っても……」

そういううちにも幾度も息がとまりかける。一生懸命力をいれて吸いこもうとするのだが。

「誰か教えてくださらないかしらん。どうしても息がで
きなくなってしまう」

しまいにはうかされたように

「誰か息をこしらえてちょうだい」

といった。また

「なにかいってはすぐ忘れてしまうから始終氷を口へい
れてて、そのあいだだけわかるから」

ともいった。いつもながらこういう場合ほど我々の無能
がよくあらわれることはない。私たちは死神にいいよう
に料理されている病人をとりまいてしんから手もち不沙

汰に控えていた。私は自分をはじめ人たちを見まわして
思わずふきだしそうになった。私は立って窓のそばへい
って外を眺めていた。ちようど夕だちがあがって雲の塊
がふわふわと飛んでいった。やがて熱い日になって強い
風がおさまった。

そんなにしてなんべんも息がとまりかかるのを注射で
とりとめとりとめ三時ごろにもなったが××さんは帰っ
てこなかった。しまいには病院の入口から病室まであき
あきするほど長い廊下のところどころに人が立って、×
×さんの姿がみえると同時に出来るだけはやく病室へし

らせる手筈になった。そこへやっこのことで××さんが帰ってきた。私は気がらくになった。あとはただもう死ぬだけのことだ。××さんが帰ったときには目はあかなくなかった。××さんが手をとって

「わかるか」

といたらうなずいて

「声でわかる」

といった。——誰か泣いた。——注射などしているうちに不意にぱつちりと目をあいた。そして皆の顔なぞ見まわしてにこにこしながら

「またわかるようになった」

といった。妹はそのときからもうちつとも肉体的の苦痛を感じなかった。——モヒの注射をしたのではなかったかと今思う。——顔に血のけも出てきた。そして××さんにと手をとられてなにか問われるままにいつもの苦痛のないときのおりに話していた。しかしごく緩慢な週期をもつて意識の明瞭なときと不明瞭なときが交互にくるのを自分でも気がついていっている様子であった。その意識の不明瞭なときには脈も呼吸も変調を呈しているのであった。明暗の週期が次第に速くなって一步一步最後に近づ

いてきた。私もちよいと手をとってみたがいつのまにか先が蒼白に冷たくなっていた。とうとう妹はなにかいつているうちに あ あ あーと息をひいて五六秒のあいだ呼吸がとまっていたが、見ているうちにちようどうなされた者が目をさますときのようにはっと目をあいて あー と溜息をし、また息をふきかえして、私たちの顔をみてさも嬉しそうになっこり笑った。

「どうした。嬉しいか」

××さんがいったら軽くうなずいて

「またわかってきた」

といった。私はいよいよ死んだと思ったのが生きかえったので不思議な気もちがした。妹は泣いている母や皆の顔をきよとんとして見まわしていた。××さんと話しているあいだにときどきじつと私のところに瞳がとまることがあった。眼の色がうすくなってきた。私は まだ見えるかしら とおもってすこしそばへよって

「みえるか」

といったらかすかにほほえんですこしうなずいた。私はこのいいようなない静な不思議な様子をよく見ようと思つて、寝台にかた肱ひじをつきながら、刻々弱つてゆく彼女を

仔細に観察して要所要所を手帳にかきとめた。妹は絶えず脈をとっている××さんと話しているうちにしまい「もうあなたと話すのもこれきりかもしれなくてよ。すぐわからなくなるんですもの。ほら……」

そういつてこつりと息をとめて眼をとじてしまった。

××さんは待ちかまえていて注射をする。一言もものという者が無い。静である。そこには××さんと私と二人の母のほか誰もいなかった。眼をとじた顔を見つめて待っていることやがて息をふきかえす。いよいよ頼みずくになつてきたので××さんが

「なにかいいのこすことはないか」

といたらわずかに笑みをうかめてうなずいた。もう死ぬのはなんともなかったのかもしれない。よくいったように死にたかったのかもしれない。××さんは床に顔をおしつけてたまらなそうに泣いた。……妹の瞳孔は散大してなにも見えないらしかったが、その眼もとうとうつぶってしまった。それでもなにかいうらしく唇をうごかして自分の顔のまえにかきさぐるような手つきをした。が、間もなく息をひきとった。最後の息というものはいくたび見ても最後らしく、そしてよそ目にはせつな

そんなものである。皆はまわりによって泣いた。私はそういう場合の私の習慣？ にしたがって涙はひとつぶもこぼさなかった。そうして彼女の死のためにひとに忘れられてからからになっている西洋海^{かいどう}棠に水をかけてやった。鳩がいつものとおり餌をひろいにきていた。晴れて熱い夕べであった。名物の夕なぎがはじまってポプラーも夾竹桃も細工物のように静にたっていた。

屍体を家にはこんで座敷にねせておく。こうなると私はいつも奇異な気もちに襲われる。この陶物すえものの人形みたいに横わっているものをみて　これはいったいなんだろう

う　　と思う。釜屋の親仁おやじは子供をつれてきて

「これみいさいや。お母様はなんまみ様にならっしやっ
たが」

という。子供はけろりとして眺めている。

みんなそれぞれの用事にまぎれてるので屍体が床のま
えにおきはなされている。で、寂しがって私をよんだこ
となど思いだしてそばに坐っている。

翌日入棺。土地の習いでみんなして南無阿弥陀仏を紙
にかいていれてやる。釜屋の親仁は

「私もいれさせていたただきましようわい」

と行って書いていれる。身うちの者だけはまた手足の爪をきって紙に包んでいれる。平生痼性へいぜいかんしょうに爪をきる私にはとろうにも爪がない。で、申訳ばかりけずっていれる。蒼白く硬直して窮屈な棺のなかに合掌している死骸をふとみればやっぱり妹のような気もする。この手は昨日まで寂しいから といって私にさしだしたそれにちがいない。夜、火葬場へゆく。

あくる朝はやく××さんと壺をもって骨をひろいにゆく。隠坊おんぼうが目塗の土をばらばらとはぎおとして鉄の扉をあける。鉄板のうえに砕けた骨が灰にまざっているのを

荒神箒こうじんぼうきに長い柄をつけたようなものでかきだして扱えり
わける。焼き場もりの男は窯かまの後ろの口へまわって

「これだけむこうに落ちとりしましたで」

と頭蓋骨のつぎめからはなれたのを二三枚拾ってきた。

私たちは灰のなかから　これが肋骨、これが椎骨ついきこつ、大腿

骨　なぞとひとつひとついじってみては壺にいれる。大
きなのはからりと、小さなのはちりちりと音がする。骨
のなかに黒ずんだのがあるのを焼き場もりの男は

「脂などがあるとどうしてもこうなります」

といってつまみだしてみせる。そばで隠坊が骨の粉をふ

るいはじめたので灰かぐらうがもうもうとたつ。私たちはしばらく外へ出る。海には——火葬場は海にあつた。

——玄海島、のこの島、鹿の島などというのがみえる。沖のほうに海の中道といって長くながつきでた砂洲さすがある。舟がすきな妹はそこへゆきたがつていたのでいつかつれてゆくはずだったのだそうだ。ふるいわけられたなかからまたいくつかの歯をひろいだす。壺が小さくてはいりきらないのを焼場もりの男が上からおしつけて骨をみじやくので大きなのととりかえる。

つぎの朝庭の赤い実のなる木に蟬のぬけ殻があつたの

を、よくみればそばにぬけたばかりのみんながじっと休んでいた。どこもかしこもまだみずみずしくうすい色をして、はね翅など白珊瑚さんごと翡翠ひすいの骨組に水晶をのべてはつたようなのが、露にぬれてしっとりとしている……

夜。葬式。寺の墓地は広くて、大鳥毛みたいな形をした銀杏いちしようの大木が五六本まっ黒にならんでいた。妹の墓は実をもったはずの木にあいだにたてられた。

妹は二十三であった。面影は十七年ものながいあいだいつも昨日のように鮮あざやかにのこって、そのまま私が年

をとるだけ若く子供らしくなっていた。その面影を
目に浮べながら私は筆をとった。そうしてこの小品を
書きおえるまでにいくたびも筆をおいてともすれば溢
れそうになる涙をとめなければならなかった。私は今
にして自分がいかに深く彼女を愛していたかを知っ
た。

(昭和三年)

日本文学電子図書館

妹の死

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 29

筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第1刷発行



日本文学電子図書館